

超高齢社会・現代日本の〈迷惑〉意識：  
海外との比較を通して

**Feelings of "Meiwaku/Burden" in Contemporary Japan as a Super-Aging Society:  
Through a Comparison with Foreign Countries**

特集にあたって

本村昌文<sup>\*1</sup>

**Introduction to Special Feature**

Masafumi MOTOMURA<sup>\*1</sup>

**Abstract** - This special feature is based on the symposium, "Feelings of "Meiwaku/Burden" in Modern Japan's Super-aging Society," which was held on Monday, September 19, 2022. This symposium was sponsored by JSPS KAKENHI Grant Number JP20A00007. This project focuses on the fact that when people think about aging, end-of-life care, and death in modern Japan, many feel that "they do not want to be a burden to others." The project is divided into three research groups: historic studies, studies of contemporary Japan, and field research. The symposium reported the results of the contemporary Japan research group, which is halfway through its research. The symposium consisted of two sessions, and this special feature is based on the three participants in the session titled "Feelings of "Meiwaku/Burden" : A Comparison with Other Countries." Ryozo Suzuki's study focuses on "the giving of gifts as being mutual actions of giving and receiving" to understand the elderly's feelings of meiwaku and analyzes the significance and complex structures of the feeling of "being a burden to others" at the end of one's life. Haruka Hikasa's study considers the feelings of meiwaku in relation to the subject's autonomy in the context of medical care provided to people with terminal or chronic illnesses. Natsumi Tanaka's study examines the feelings of *meiwaku* among the elderly in France and is based on the work of Simone de Beauvoir. She determines the motivations behind the elderly's feelings of meiwaku and categorizes them. The abovementioned studies present important research results and facilitate future comparative research on the feelings of meiwaku between Japan and other countries.

1. はじめに

本特集は、2022年9月19日(月)に開催したシンポジウム「超高齢社会・現代日本の〈迷惑〉意識」をもとにしたものである。このシンポジウムの主催は、科研費・基盤研究A「日本社会

の「若い」をめぐる分野横断的研究—「迷惑」と「ジリツ」の観点から」(課題番号20A00007)である。このプロジェクトの中間的な研究成果を報告する一環としてシンポジウムを企画・実施した。本特集にあたって、科研費のプロジェクトおよびシンポジウムの概要を示し、本特集の構成について述べておきたい。

2. 〈迷惑〉意識を探る研究プロジェクト

\*1: 岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域

\*1: Faculty of Interdisciplinary Science and Engineering in Health Systems, Okayama University

高齢化率が28%を越え(「令和4年版高齢社会白書」), 超高齢社会を迎えている日本において, 老い・看取り・死を考える際に, 「(家族や子ども等に) 迷惑をかけたくない」という意識を抱く人が多い。少し注意すれば, 雑誌や新聞, 映画, ドラマ, CM等の老い・看取り・死に関わる場面で, 「家族や子どもに迷惑をかけたくない」等のフレーズが飛び交っていることに気づく。また, 「平成29年度人生の最終段階における医療に関する意識調査」(厚生労働省)のなかで, 「どこで最期を迎えたいかを考える際に, 重要だと思うこと」(複数回答可)という問いについて, 「家族等の負担にならないこと」の回答の割合が, 一般市民・医師・看護師・介護職員の回答でそれぞれ73.3%, 72.6%, 76.6%, 80.4%となっている。ちなみに, 一般市民, 医師, 介護職員では「家族等の負担にならないこと」が第1位である。さらに, 理想の死を「迷惑かけない死」と考えているという報告もある(浅見洋・中村順子ほか「ルーラルエリアにおける住民の死生観と終末期療養希望の変容—秋田・島根の中山間地における経時的調査より—」『石川看護雑誌』13, 2016年)。

以上のように, 老い・看取り・死について考える際に, 多くの人が「迷惑をかけたくない」と思うにもかかわらず, この意識がどのようなものなのか, なぜこうした意識を抱くのかという点については, 本格的な研究がなされていない。こうした現状をふまえて構想されたのが, 先述した科研費・基盤研究A「日本社会の「老い」をめぐる分野横断的研究」のプロジェクトである。

老い・看取り・死を考える際に立ち現れる「迷惑をかけたくない」という意識は, 他の類似する表現—「迷惑をかけたくない」のほか, 「お世話になりたくない」「苦勞をかけたくない」「面倒をかけたくない」「負担をかけたくない」などで示されることもある。そのため, 本プロジェクトでは, こうした類似表現をいったんひとまとめにして「〈迷惑〉意識」と名づけ(本特集の論文においても, この表記を使用している), 以下の3つの研究班に分かれて研究を進め, その成果を統合し, 老い・看取り・死に関わる〈迷惑〉意識の正体を明らかにすることを試みている。

- \* 歴史班 (過去の日本における〈迷惑〉意識の考察)
- \* 現代日本研究班 (現代日本の文献資料に現われる〈迷惑〉意識の考察)
- \* フィールド調査班 (看護学や文化人類学的手法に基づく現代日本および日本と異なる地域の〈迷惑〉意識の考察)

### 3. 現代日本研究班のシンポジウム

先述した2022年9月19日のシンポジウムは, 上記の研究グループのうち, 現代日本研究班の中間的な成果を報告する企画であった。当日は台風の接近により, 対面での開催を断念せざるをえず, オンラインのみでの開催となった。天候には恵まれなかったが, 参加者は約90名, 以下のような2部構成で実施した(本シンポジウムの様子については, 山陽新聞2022年9月20日朝刊「全県版」に掲載された)。

#### 開会・趣旨説明

現代日本における老いと〈迷惑〉意識

工藤洋子 (東北福祉大学)

日本の〈迷惑〉意識に関する文献レビュー

山本栄美子 (東京大学)

『恍惚の人』以降の「老い」・「介護」意識の変容—いつから〈迷惑〉意識を持つようになったのか

吉葉恭行 (岡山大学)

介護技術開発と〈迷惑〉意識

〈コメント〉

山本大介 (大東文化大学)

小野真由美 (ノートルダム清心女子大学)

〈迷惑〉意識の海外との比較

田中菜摘 (岡山大学)

『穏やかな死』における〈迷惑〉の用例

日笠晴香 (岡山大学)

〈迷惑〉意識と自律—スピリチュアルペインとSPBの議論を手がかりに

鈴木亮三 (岡山大学)

相互行為としての〈迷惑〉意識

〈コメント〉

島田雄一郎 (大島商船高等専門学校)

大塚美樹 (島根県立大学)

全体討論

## 4. 本特集の構成

本特集は, 上記のうち, 「〈迷惑〉意識の海外との比較」の3名の報告をもとに構成されている。各論文の意義について, 従来の研究動向と対比しつつ記しておきたい。

従来の研究は, およそ①歴史的視点からのアプローチ(〈迷惑〉意識の歴史的な変遷, 「迷惑」という語彙の変遷等), ②空間的な視点からのアプローチ(〈迷惑〉意識が日本固有のものである, 様々な文化圏でみられるものであり文化によって発現の形態や機能が異なる等), ③現代日本の医療・介護の場における〈迷惑〉意識へのアプローチ(〈迷惑〉意識のもつ意味の多様性等), ④〈迷惑〉意識を捉える枠組みや理論に関する研究, の4つに大別できる。本特集に関わるのは主に②③であるが, ④の研究成果を再考することも試みている。

鈴木論文は, 高齢者の抱く〈迷惑〉意識を捉える視座として, 「「あげる」/「もらう」という相互行為としての贈与」に着目し, 柳田国男, 戸井田道三, 土居健郎, 和辻哲郎, ルース・ベネディクト, マルセル・モース, ラフカディオ・ハーンの文献をもとに, 人と人との関係を解きほぐし, 人生の最期に〈迷惑〉意識を持つことの意味, その複雑な構造について分析を試みている。こうした試みは, ③の研究において明らかにされてきた〈迷惑〉意識とその裏側にある多様な意識をどのように捉えていけばよいのか, さらに〈迷惑〉意識の全体的な構造はいかなるものなのかという問いを探究する道標となる。

さらに, 鈴木論文の持つ意味は, ④の研究, とくに海外でなさ

れている「相手の負担になっていることがつらいという自己認識 (self-perceived burden)」(以下、SPB と記す)の研究で指摘されている〈迷惑〉意識を概念的に説明する理論—衡平理論 (「個々人は、人間関係において、利益(receiving help and support)と貢献(giving help and support)との間でバランスを維持するように努める」)—では、日本の高齢者が抱く〈迷惑〉意識を説明できない部分があることを示唆しているところにある。この点は、今後、日本における老い・看取り・死をめぐる〈迷惑〉意識を捉える理論的な枠組みを検討するための導きの糸になるであろう。

日笠論文は、「終末期の疾患や慢性疾患を有する人の医療ケアに関連する文脈に着目」して、〈迷惑〉意識を「自律」との関連で考察をしている。先述した③の先行研究では、〈迷惑〉意識の裏側にはさまざまな意味があるということが明らかにされているが、そのなかで多くの論文で指摘されているのが「自律」「自立」の意識との関連である。しかし、従来の先行研究では、〈迷惑〉意識の裏側に「自律」「自立」の意識があるということが指摘されるにとどまり、具体的な考察は進んでいない。さらに、そもそも「自律」「自立」が混在して使用される例もあり、〈迷惑〉意識と「自律」の関係のみならず、「自律」「自立」の意識の整理も必要である。こうした研究動向に対して、日笠論文は一石を投じることになるであろう。

さらに、日笠論文では、これまで主に②の研究において〈迷惑〉意識が「日本的」として捉えられていたことに対し、海外のSPB研究に目を向け、日本の医療ケアにおける文脈で取り上げられる〈迷惑〉意識と海外のSPB研究とを綿密に比較検討し、両者の構成要素の重なり合う部分を明らかにしている。以上の点は、日本と異なる地域における〈迷惑〉意識との比較研究の新局面を切り開く貴重な試みである。

田中論文は、高齢者の抱く〈迷惑〉意識の動機付けに注目し、〈迷惑〉意識の類型化を試みている。その際に、フランス人高齢者の〈迷惑〉意識に着目する。本論文ではシモーヌ・ド・ボーヴォワールの『おだやかな死』(実母を看取った記録)、『別れの儀式』(哲学者サルトルを看取るまでの約10年間の生活記録)をもとに、日本の「迷惑」に相当するフランス語の用例を検討し、人間関係に動機付けられた〈人間関係的迷惑〉意識、〈心情的迷惑〉意識、〈身体的・物理的迷惑〉意識の3つに類型化できることを明らかにしている。以上の研究成果は、②の先行研究に対し、高齢者の抱く〈迷惑〉意識が日本的なのか、日本的でないとしたら共通点と差異はどこにあるのかという日本と日本以外の地域における〈迷惑〉意識の比較研究を飛躍的に進展させることになるだろう。さらに、フランス語における〈迷惑〉意識の用例を類型化することで、非英語圏の地域との比較検討の扉を開いていることに大きな意義がある。

さらに、田中論文のなかで指摘されていることであるが、フランス語圏の〈迷惑〉意識の類型化を試みは、多様な意味を背後に有する現代日本の老い・看取り・死をめぐる〈迷惑〉意識の類型化に適応していくことで、③の研究動向にも新たな潮流を生み出すことになるであろう。

「家族や子どもに迷惑をかけたくない」—誰もがどこかで耳にしたことがあり、自分でも同じような思いを抱くこともある

ような、そうしたごくありふれた、ともすれば見逃してしまうような〈迷惑〉意識に目を向けることで広がる新たな景色を本特集で垣間見ていただければ望外の喜びである。